

口頭発表「動物飼育が子どもの心情に与えるもの」

小椋 郁夫



1 はじめに

「動物を飼育した子どもや教員の感動の体験：第8回全国学校飼育動物研究会（小椋・白木・堀部2008）」では、岐阜県内のウサギやニワトリ、チャボなどの動物を飼育している4,059名の児童とその指導者161名から「動物を飼育して、うれしかったこと、分かったこと、悲しかったこと、困ったこと、分からないこと」などについて、自由記述でのアンケートを行い、21,000文の記述を分類整理して、多くの感動的な言葉を通して、飼育することによっての生命尊重の豊かな心情が育成されていることが分かった。

今回の小学校学習指導要領解説生活編第1章総説 2生活科改訂の趣旨(2)改善の的事項(I)」にも、「自然に直接触れる体験や動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど、自然のすばらしさや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮する。」また、さらに「第3章生活科の内容 第2節生活科の内容(7)にも、「動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命がもっていることや成長していることに気づき、生命をもっていることや成長していることに気づき、生き物への親しみをもち、大切にすることができるようになる。」と記述され、学校での動物の飼育や植物の栽培の必要性が改めて見直されるようになった。

しかし、昨今の鳥インフルエンザの流行などにより、動物を飼育する学校、とりわけニワトリを飼育する学年が激減している現状、また、ウサギが死んだらそ

れ以後飼育をやめてしまう学校の現状など、前記した動物飼育の重要性、生活科の学習指導要領解説に飼育することの大切さが述べられている現状とは相反している傾向がある。

たとえば、岐阜県岐阜地区の平成22年度から26年度までの飼育動物状況をみても、(飼育施設数) 85施設→64施設で21施設減、(ウサギ飼育頭数) 293頭→206頭で87頭減、(その他の動物飼育頭数) 154→77頭で77頭減、とすべてに減少傾向にある。

2 研究方法

(1) アンケートの内容

1で述べた学校での動物飼育が、児童の感動体験や豊かな心の育成に関連していることをさらに明確にするために、今回は、飼育を行っている学年とその前の学年に対して、

○あなたは、学校で飼っているウサギについてどんなことを知っていますか。
あるだけ教えてください。

1.
2.
3.
4.
5.
6.
7.
14.
15.

これは、前回2008年のアンケートの実施において、「うれしかったこと」、「分かったこと」、「悲しかったこと」など、細分化して質問することによって、自分の思いをどちらに書けばいいか迷っている児童が多く見られたことによる。

また、記述は自由記述で箇条書きにさせ、15個書けるようにした。また、もっと書ける児童に対しては、「=もっとあったら、うらに書いてくださいね=」と表の用紙の一番最後に記述した。

(2) 対象学校・学級

対象学校・学級、児童の人数は次のとおりである。

(A 小学校)飼育学年 = 4 年生 53 名, 飼育前学年 = 3 年生 50 名

(B 小学校)飼育学年 = 3 年生 55 名, 飼育前学年 = 2 年生 54 名

(C 小学校)飼育学年 = 4 年生 34 名, 飼育前学年 = 3 年生 35 名

3 研究結果と考察

(1) アンケートの分類と集計結果

それぞれのアンケートの結果を「食べ物」、「体の様子」、「見た目」、「様子」、「感触」、「分類」、「生と死」、「学級」、「動き方」、「その他」の10項目に分けた。それぞれにどのような記述があるか一例を述べると次のとおりである。

- 「食べ物」では・・・ラビットフード、白菜、キャベツ、ニンジン、ホウレンソウなど
- 「体の様子」では・・・目が赤い、耳が長い・ぴんと立っている、しっぽが短い・丸い など
- 「見た目」では・・・可愛い、おとなしいなど

○「感触」では・・・気持ちいい、温かいなど

○「様子」では・・・いつも走っている、元気、人に慣れる、よく食べる、鼻がくんくんなど

○「分類」では・・・ほ乳類、夜行性など

○「学級」では・・・○年○組のウサギなど

○「生と死」では・・・赤ちゃんが生まれた、赤ちゃんは違う部屋に入れる、死んで悲しいなど

○「動き方」では・・・飛び跳ねる、ジャンプが強く上手、穴にはいる、土を掘る、逃げるなど

○「その他」・・・糞が丸い、ミルクを温めてあげる、雑草注意、雄と雌がいる、喧嘩するなど

具体的には、【図1 アンケートの回答例(B小学校3年生)】、【図2 アンケートの回答例(C小学校4年)】を見ていただきたい。

【図1】アンケートの回答例(B小学校3年生)

児童	食べ物	体の様子	見た目	様子	感触	分類	生と死	学級	動き方	その他
A	↑	耳が赤い	毛がふわふわ	えさを食べる 水を飲む おしっこをする	ふわふわ		土の中で赤ち ゃんを産む		足で砂を掘る まばしっこい	うんこが丸い
B	ニンジン キャベツ ラビットフード						穴を掘って赤 ちゃんを産む			こわい噴霧がある 食べられないものを あげない
C		目が赤い 背中とおし りがある 上の歯が長い	白、灰色 同じ色 毛が長い 毛が短い	えさを食べる				三年生 で飼育		うんこは丸い てうしの仕方 たっこの仕方 つめの切り方
D	キャベツ ニンジン うんち	耳が長い	毛がふわふわ	木の棒で歯をけずる 腫れたところ 穴を掘るのが好き	ふわふわ		土の中で赤ち ゃんを産む			耳も耳くそがあっ たら病気
E	ニンジン キャベツ	つめに血管 がある 目は黒や赤	黒、白、茶 色の歯が 白い 毛がたくま ん 毛が少ない	水よりえさを食べる 産卵も卵とおとなしい時がある 砂箱に入りやすい トングで丸に入りやすい えさを舐めるとよってくる なでるとおとなしい 重いウサギが箱に入りやすい 砂をかけてくる		種類			足が速い まばしっこい	おしっこが黄色い おしっこより丸 をする
F	やわらかい うんこ クワの皮 ニンジン ラビットフード	上の歯が長 い	毛が長い 毛が短い 白と茶色	耳がいい 土を掘る			土の中で赤ち ゃんを産む		足でいろいろ なところをかく まばしっこい	うんちが丸い 持ち方 耳を持たない しっぽを持たない
G	ラビットフード ニンジン キャベツ		小さい 黒、茶色	ママネギ、ネギがきらい 辛いときはかたまる ペロペロと水を飲む	ふわふわ やわらかい				まばしっこい	お尻にいる お尻ずつに分けら れた
H	キャベツ ニンジン	上の歯が長 い	黒、白、茶	元気に走り回る おしっこをする うまく穴を掘る	あたたか い		たくさん赤ち ゃんを産む		うまく遊ぶ	いろいろな表情が ある 持ち方に気をつけ る

(図2) アンケートの回答例(小学校4年生)

児童	食べ物	体の様子	見た目	様子	感触	分類	生と死	学級	動き方	その他
A	ラビットフード 野菜			・顔からなでると喜ぶ ・耳をつかんだら体を震く ・たっこをするとき目をかくすとおとなしくなる ・つめを切るとき、赤く見えるところは切らない ・えさをいつまでたってもえさをやらないかと思ったら怒ってかむ ・追いかけて回すとストレスがたまる			・赤ちゃんをたくさん産む			・赤ちゃんをのぞきこむとお母さんは有てなくなる ・赤ちゃんを産んだら、掃除もしないでそっとしておく ・妊娠中のウサギにはご飯をたくさんあげる ・ウサギは選り気が昔手だから体をめらさない
B	野菜 ラビットフード	長い耳	太っている	・かむ ・えさをばらまく ・毛がたくさん出る ・トイレでしっかりと糞をする ・餌箱に糞をするウサギもいる ・毛をかけるウサギもいる ・おとなしい ・産まれたウサギは脱走名人 ・好き嫌いの多いウサギがいる ・たっこが嫌いならウサギがいるくしゃみをする		・ほ乳類	・2014年8月24日に赤ちゃんが産まれた ・たくさん赤ちゃんを産んだウサギがいる		・とてもすばやく動く ・速く走る	・右横・左横に糞をする ・マシユマロはシロップの子ども ・ライトはシロップの子ども ・豚とどのウサギがお年より
C	ラビットフード		耳が長い	・えさ箱に穴を掘ろうとする ・好き嫌いがある ・目でまわりをよく見回す	・毛が柔らかい		・赤ちゃんの小屋の狭くできるまですると糞が飛ぶから厄難 ・赤ちゃんを産むとき母親は毛を抜いている		・木を跳ぶ	
D	野菜(おやつ)		毛が増える	・10年以上生きるウサギもいる ・みんな警戒心が強い ・興奮したり怖くなくなる ・けんかをすると相手の鼻もとをかむくしゃみをする ・きれい好き			・赤ちゃんを産む(6〜8羽) ・3匹死んだ(母が原因)			・妊娠2日前に毛を抜く ・ウサギにもアレルギーがある
E	野菜	しっぽが短い		・小風に戻さうとすると突然暴れ出す ・赤ちゃんが産まれたらその部屋をのぞかない ・食いしん坊			・赤ちゃんが産まれた ・今いるウサギの他にもいた		・ジャンプする	・雑草は菌がついているのであげるのはよくない ・ライトとマシユマロはシロップから産まれた

(2) 集計結果の考察

次に、各学校の各学級それぞれで、この10項目について記述した個数を比較し

た。その結果、【図3 各小学校、各学級の10項目の比較】のような結果となった。

(図3) 各小学校、各学級の10項目の比較

【上段】各項目に記述した学級のべ個数 【下段()内】一人あたりの平均個数
各学年の下の数(丸太ゴチ)＝一人平均の記述個数

	【食べ物】	【体】	【見た目】	【様子】	【感触】	【分類】	【生と死】	【学級】	【動き方】	【その他】	
学校・学年	A3年	16	64	45	51	3	3	5	10	22	0
一人平均記述数	3.1	(0.3)	(1.3)	(0.9)	(1.0)	(0.1)	(0.1)	(0.1)	(0.2)	(0.4)	(0)
学校・学年	A4年	50	29	18	151	0	2	0	0	51	0
一人平均記述数	5.6	(0.9)	(0.5)	(0.3)	(2.8)	(0)	(0.04)	(0)	(0)	(1.0)	(0)
学校・学年	B2年	92	74	40	58	9	1	7	0	28	87
一人平均記述数	7.3	(1.7)	(1.4)	(0.7)	(1.0)	(0.2)	(0.02)	(0.1)	(0)	(0.5)	(1.6)
学校・学年	B3年	84	29	83	150	5	2	11	5	26	91
一人平均記述数	8.8	(1.5)	(0.5)	(1.5)	(2.7)	(0.1)	(0.04)	(0.2)	(0.1)	(0.5)	(1.7)
学校・学年	C3年	34	61	54	19	3	4	18	8	13	5
一人平均記述数	6.3	(1.0)	(1.8)	(1.6)	(0.6)	(0.1)	(0.1)	(0.5)	(0.2)	(0.4)	(0.1)
学校・学年	C4年	41	0	10	256	0	0	23	0	3	26
一人平均記述数	10.6	(1.2)	(0)	(0.3)	(7.6)	(0)	(0)	(0.7)	(0)	(0.1)	(0.8)

この集計結果から、次のような考察が得られた。

- ①ウサギの飼育学年の方がウサギについての記述個数が多い。
一人あたりの記述個数の平均は、A小

では、飼育学年(4年)5.6個と飼育前学年(3年)3.1個、B小では、飼育学年(3年)8.8個と飼育前学年(2年)7.3個、C小では、飼育学年(4年)10.6個と飼育前学年(3年)6.3個であり、どの学校でも、

飼育学年の方が飼育前学年よりも多く記述できていた。

②飼育前学年は、「体」や「見た目」などの見て分かる記述が多いが、飼育学年は「様子」について自分たちが飼育していく中で体験した事実や考えを多く記述している。

「様子」の記述は、A小では、飼育学年(4年)151個と飼育前学年(3年)51個、B小では、飼育学年(3年)150個と飼育前学年(4年)58個、C小では、飼育学年(4年)256個と飼育前学年(4年)19個であり、どの学校でも、「様子」の記述が飼育学年の方が飼育前学年よりも多く記述できていた。

③全体の個数を比較するために個数の多い順に並べてみると、C小飼育学年(4年)10.6個→B小飼育学年(3年)8.8個→B小飼育前学年(2年)7.3個→C小飼育前学年(3年)6.3個→A小飼育学年(4年)5.6個→A小飼育前学年(3年)3.1個であった。

このことから、次のように考察した。

○C小小学校は、学校に入る校門のすぐ横にウサギとニワトリ、アヒルの飼育小屋があり、児童は毎日、そのそばを通過して登校する。また、4年生全体でウサギを飼育している学級とニワトリを飼育している学級があり、お互いが高め合うための飼育の交流も継続的に行っている。

○A小小学校は、ウサギのみの飼育であり、飼育担当以外の児童は飼育小屋に行くことは少ないし、飼育活動の交流も継続的には行われていない。

以上により、4年生が飼育学年、3年生が飼育前学年という同一条件であっても、C小小学校とA小小学校で記述する個数が大きく違う原因は、飼育環境や飼育種類、飼育の交流回数の違いが影響していると考えられる。

注目すべきは、B小小学校である。この学校は40年ほど前に県内に先駆けて「動物ランド」をつくり、各学年が分担していろいろな動物を飼育し定期的に活動の交流を行っている。この「動物ランド」は、保護者の協力で建設されたものでもあり、地域ぐるみで、子どもたちに動物を愛する心情をもてるようにさせようとしているし、維持や管理などに関しても、

餌の調達や施設の補修など、継続的に協力してくれている。また、ビッグイベントである「動物ランド祭」も創設当時から今に至るまで、実施されている。

飼育前学年の2年生も同じランド内でモルモットを飼育しており、常に自分たちが飼育している動物以外の動物の観察も行える環境にある。

この飼育環境や飼育種類、飼育体験から、3年生であってもA小小学校の4年生よりも多く記述できている。また、2年生であってもA小小学校の3・4年生、C小小学校の3年生よりも多く記述できている。まさに、飼育環境や飼育種類、飼育体験など、学校での動物飼育が児童一人一人の豊かな心情を育成しているのである。

4 おわりに

以前、B小小学校のある市の教育長さんから、こんなお話を伺ったことがある。

「E中学校には、B小小学校とD小小学校の子どもが来るが、B小小学校の子どもたちは挨拶もしっかりするし、心優しい子どもが多いと先生方がしている。きっと、継続して動物を飼育しているからではないかと私は感じている。動物を飼育するのは大切なことですね。」

動物を飼育すれば子どもたちの心豊かな人間性は必ず醸成されることが、今回の研究からも少し、明確になったと感じている。今後も、動物飼育のが子どもの心情に与える調査を行い、その結果を多くの場で報告し、動物を飼育する学校が一つでも多く増えていくことを願っている。

(名古屋女子大学)

【参考文献】

- ・文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」日本文教出版、平成20年8月
- ・小椋郁夫、堀部昇、白木和雄「学校での動物飼育とその成果：平成18年度岐阜県獣医師会シンポジウム(小椋2007)」
- ・小椋郁夫、堀部昇、白木和雄「学校飼育動物の現状と課題：日本理科学会全国大会(2007)」
- ・小椋郁夫、堀部昇、白木和雄「動物を飼育した子どもや教員の感動の体験：第8回全国学校飼育動物研究会(2008)」